

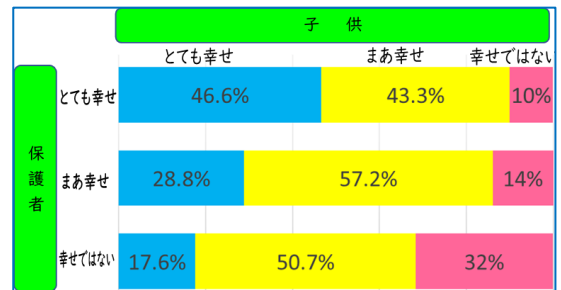


## 「子供の幸せ」についての一考察

「教育とは子供たち一人一人の幸せに向けての礎を創ることだ」とお世話になった校長先生からの金言が今でも記憶に残っています。さて、幸福度と言えば、私は真っ先にボタンを思い浮かべます。発展途上国でも、国民が皆一様に「雨風をしのげる家があり、食べる物があり、家族がいるから幸せだ」と答える姿が報じられて一躍有名になったからです。

日本の場合は、先進国で1人当たり所得が高いにもかかわらず主観的な幸福感が低いという傾向があります。そうした中で、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が行った約2万組の親子の継続調査によると、親子の「幸せ実感」は、互いに影響し合うことが明らかになりました。

右の図は、保護者とその子供（小4～高校生）を対象に、自分が幸せかどうかを尋ねたところ、現在「とても幸せ」と回答した保護者の子供の46.6%が、同じく「とても幸せ」と回答しています。一方で、「幸せではない」と回答した保護者の子供が「とても幸せ」と回答した比率は17.6%にとどまっています。



また、保護者が「幸せではない」と回答していると、「幸せではない」と回答する子供の割合が高まることもわかりました。この結果から、親子の幸せ実感は、相互に関連していることが分かります。また、子供がどんなことで幸せを実感するのかの相関を調べた結果、①家族との関係の満足度 ②自分の性格の満足度 ③友達との関係の満足度 ④先生との関係満足度 ⑤自分の成績の満足度 と続きます。つまり、成績のような他者と比べることができるものより、自分の性格や、家族・友達・先生などとの人間関係における満足度のほうが、幸せ実感と関連が強いことが読み取れます。

さらに、お金と子供の幸せ実感との関連を調べるために、世帯年収による差はそれほど大きなものではないこともわかったそうです。幸せとは金銭的な豊かさでは、実感できるものとは言えないようです。それは、上のグラフが示す通り、保護者自身が幸せを実感できていることが大事です。それでは、幸せを感じている保護者の普段の生活と、幸せ実感との関連を調べてみると、①趣味やスポーツを楽しむ ②自分の能力を高めるための勉強をする ③友人と過ごす・話をする ④近所の人と話をする という機会がある保護者は、そうした機会がない保護者よりも「とても幸せ」と感じる割合が高いことが分かったそうです。

ここには大きなヒントが隠されています。仕事が忙しいので普段、「子供のために何もしてやれない」という発想からの転換です。1日の中で、ほんの数分でも自分時間を楽しむといった、小さな隙間時間を活かすことが大切になってきます。子供とおしゃべりする、好きなテレビを観る、音楽を聴くといった小さな喜びが、小さな満足度と結び付き、幸福度を押し上げ、子供たちもそれに幸せを感じるのです。

まずは目の前の子供と小さな時間を共有することから始めると、そこに親子の幸福度を上げるヒントがあるかもしれませんね。